

樹里安だより



2023年
Vol.43



＼ 植木屋さんの／
おすすめ植物

その8

ツツジ



ツツジってどんな植物？

街路などでよく見られるおなじみの花木である。花期は4月から初夏まで、花つきが良く、性質は強健で日当たりや風通しが悪い環境にも耐える。仕立て方によって生垣、玉仕立てなど比較的自由に樹形を整えることが可能で、様々な花色があることから、庭づくりの際にも和洋問わず様々な場所に植えることができる。



川口市公園紹介記

その8

歴史と自然、文化を紡ぐ 緑のオアシス

～赤山歴史自然公園・イイナパーク川口 界限～

その昔、川口赤山に城があり殿様がいた！

東京メトロに直結、埼玉と東京・神奈川を結ぶ地下鉄「埼玉高速鉄道」、愛称埼玉スタジアム線。この新井宿駅の北東約1.5km「赤山」の地に、関東郡代(幕府直轄地支配大代官)伊奈氏の赤山城(陣屋)があります。往時の城の総構えは、何と、77ha(東京ドーム約16個分)もの広さを誇っていました。

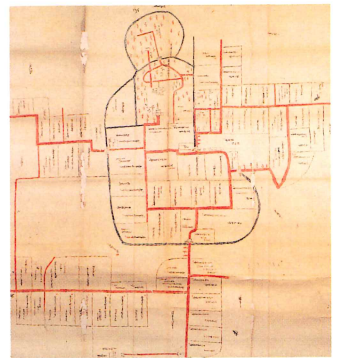
赤山の伊奈家は、現在放映中のNHK大河ドラマ「どうする家康」の主人公、徳川家康の三河(現愛知県東半部)時代からの譜代の家臣で、家康の関東入国に同行した伊奈備前守忠次の子忠治(1592-1610)を祖としています。家康の側近の一人として、幕府の政治経済基盤の拡充に尽力。優れた行政官でもあり、関東を治める代官としてその領分は武蔵・相模・下総の幕府領(現在の東京、埼玉、神奈川、千葉他)合わせて百万石に及んでいたとされています。加えて、河川改修においては持ち前の土木技術の本領を発揮。利根川の流れを大きく変え、江戸湾に注いでいたこの川を鹿島灘に付け替える大仕事を担い、現在の東京周辺の土地を水害

から守ると共に大都市江戸の礎を築きました。一方、富士山噴火による人民救済・災害復興など民政に心血を注ぎ、地域の民からは「神様・仏様・伊奈様」とうたわれたほどです。

赤山の地に10代170年間居を構え、関東の治世に貢献した川口が誇る偉人。それが、伊奈氏です！



本丸に立つ赤山城の碑



赤山陣屋敷絵図面(個人蔵)

公園の界限は歴史・緑の宝庫

「自然に恵まれ、都心からの首都高速を降りると畑や雑木林がある。江戸時代から綿々と受け継がれた植木・盆栽産地としての歴史があり、身近で緑に浸ることができる」。そこが赤山歴史自然公園・イイナパーク川口がある赤山界限の風景です。

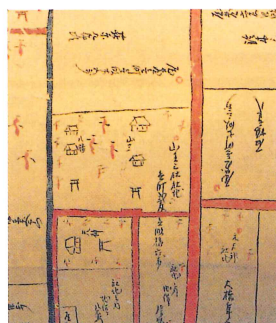
60,000㎡にも及ぶ広大な公園の中には、文化功労者で芸術院会員の日本を代表する建築家「伊東豊雄」氏が設計を手掛けた、ひと際目を引く風貌の建物が三棟点在しています。

前号でも紹介しましたが、この建築に通底する設計コンセプトは、「自然と親密な関係を結ぶこと」とされており。現在の建物が過去の赤山の歴史と自然とを繋ぐ媒体となり、今後この大地における意味合いや場との関係性の如何を、私たちに問い掛けてくれます。

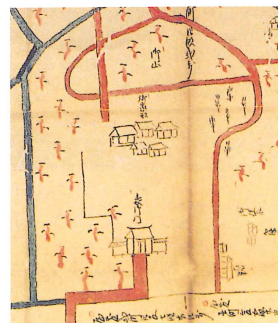
あらためて赤山の大地の原風景は何処にあるかと考えますと、伊奈氏の赤山城(陣屋)築城にまで遡ると思われます。江戸幕府が編纂した地誌『新編武蔵風土記稿』(1830年完成)には、寛永六年(1629)初代伊奈半十郎忠治が構え、10代忠尊の寛政四年(1792)に廃されたとあります。加えて、赤山近隣の安行原中山家に伝わる、往時の状況が伺える「赤山陣屋敷絵図面(市指定文化財)」によりますと、東西南北総延長約1.8kmの人工の内堀に囲まれた場所に陣屋の中核があり

ます。その中には表門や裏門。「御役家」、「御家形」と呼ばれる代官伊奈氏の執務所や居宅が。さらにこれらを取り囲む自然地形を利用した外堀の内外には、総勢50余名の家臣団の屋敷地が配置されています。また、寺社地として、東堀外側に山王三社と呼ばれる神社群。外堀の南端には伊奈家の菩提寺「源長寺」が見て取れます。築城に際しては界限の自然地形を巧みに利用。伊奈流と呼ばれる自然に身を委ねる伊奈氏の土木哲学のもとに、台地や低湿地、地形の緩急を絶妙に取り込んだ芸術作品とも見まごう設えを醸し出していました。

時が流れ今は、植木・苗木畑と融合するクヌギ、コナラなどの落葉広葉樹の雑木林。赤山日枝神社界限の鎮守の森や内堀跡の桜並木に。市民の憩いの場へとその姿を変えています。



赤山山王社の状況



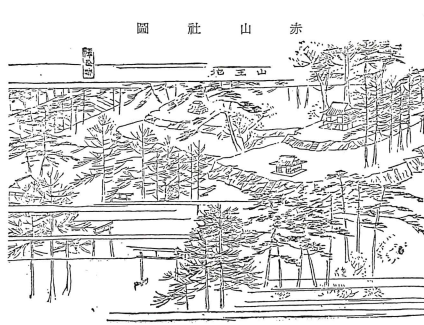
赤山城(陣屋)本丸の状況



家臣団屋敷の状況



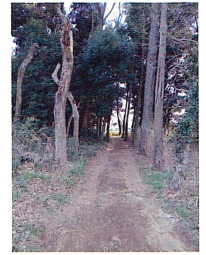
イナパーク川口・水辺の風景



赤山山王社絵図・新編武蔵風土記稿(1830年)より



陣屋内の往時の道



本丸内にある往時の道



赤山城跡の案内



イナパーク川口内の風景



ハイウェイオアシス



内堀の桜並木



鎮守の森・赤山日枝神社



赤山城(陣屋)内に残る内堀



赤山城(陣屋)本丸の風景

飢饉から民を救済した殿様の知恵

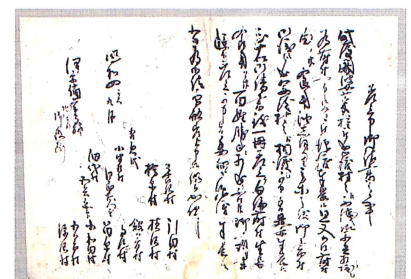
赤山周辺の農家の人たちが「のらぼう」と呼ぶ野菜があります!

アブラナ科アブラナ属の野菜、**闇婆菜**(じゃばな)で、江戸時代にインドネシアのジャワ島からオランダ船でもたらされたと言われています。食用ナバナの「のらぼう菜」で、江戸東京野菜の一つとしても有名です。実はこの闇婆菜、江戸時代中期に関東郡代赤山伊奈家8代伊奈忠宥(ただおき)が、江戸近郊の村々に奨励したものでした。9箇条に及ぶ栽培方法を添えてこの種を配るよう命じた古文書が現在も残されています(小中野村(現あきる野市)名主四郎衛門他宛 闇婆菜種御請証文。なお、地元の子生神社では毎年3月、この事績を記念した「のらぼう祭り」が行われています。同様の古文書が青梅市、埼玉県嵐山町等にも残されています)。

古文書には、飢饉に先んずること10数年前の明和四年(1767)九月の記述が見られます。そしてこのことが功を奏し、来る天明・天保の大飢饉の時には、この「のらぼう菜」が人々を飢饉から救ったと伝わっています。大飢饉を予見した川口の殿様には頭が下がる思いです! 2020年1月から始まったコロナ禍も、ようやくその収束の兆しが見えてまいりました。改めて100年前の「スペイン風邪」や過去の歴史を振り返りますと、疫病の流行と戦争そして天変地異は同時にやって来るという風潮が見て取れます。このような折、危機管理に対し真摯に向き合った伊奈氏の姿を振り返ると共に多くの先人達の英知に学び、有事への備えを常に持ち続けることの大切さを、伊奈の殿様の姿勢を通じ深く痛感いたしました。



赤山界限(新井宿)の「のらぼう菜」畑



闇婆菜種御請証文
明和4年(1767)(あきる野市HPより)

イナパーク川口・赤山界限

周辺情報

所在地 川口市赤山501-1他
公園 令和4年4月グランドオープン
公園面積 89,000㎡
公園内施設 歴史自然資料館・地域物産館・フワフワドーム・里のせせらぎ・とんぼ池・ハイウェイオアシス他

アクセス

お車：「西新井宿交差点(県道足立川口線)」を東京方面に進行
電車：「SR新井宿駅2番出口」から「赤山交差点(県道越谷鳩ヶ谷線)」経由で徒歩15分
バス：コミュニティバス「みんななかまバス」戸塚・安行循環(187便)「新井宿駅」から「門下町」下車、徒歩約8分

川口を
ふるさとに

自然との

共生社会を

目指す

波多野 純 日本工業大学名誉教授



自然って自然？

川口緑化センターを訪ねると、様々な園芸緑化商品が揃っていて、豊かな気持ちになる。大きな造園樹木もあれば、食卓の上の鉢植えもある。でも、これは自然と呼べるものだろうか。人の力でコントロールされた緑は、擬似自然に過ぎないではないか。この議論を進めると、道ばたの雑草（この言い方を私はあまり好きではないが・・）は人に頼らない自然で、たわわに実った稲穂は手の掛かった擬似自然と言う、乱暴な話になってしまう。

本当の自然は、白神山地や屋久島など世界自然遺産に登録された地域にだけ残っている訳ではない。日本のどこにでも豊かな自然は残っている。里山の風景は、「ふるさと」を構成する大切な要素であり、人々の暮らしの投影である。

ある東京近郊の町の都市計画審議会で、「里山の緑を守ろう」と発言したところ、「そんな必要はない。日本の森林の8割は植林なのだ。伐ったらまた植えればいい」と反論され言葉を失った。里山を所有する旧住民は土地を高値で売り抜くことを望み、田園風景にあこがれて移住してきた新住民が「緑を守ろう」と叫ぶが、何の力も持たない。不毛な対立を感じた。自然に対する考え方を、もう少しいねいに整理しておく必要がある。

首里城の再建とヤンバルの森

2019年10月31日、沖縄の首里城が焼け、復元された正殿などその多くが失われた。2ヶ月後、20年1月3日に焼け跡を見た時のつらさは忘れ難い。その後再建準備が着々と進められてきたが、その中で気になるキャンペーンを見つけた。「ヤンバルの森を壊さないで。首里城再建にはコンクリートと新建材を使い、ヤンバルの木を伐ることを止めて欲しい」と言う主張である。自然保護はひとつの正義に違いない。でも放置し手つかずのままの森を残すだけが自然保護とは限らない。日本人は、木を伐って建築用材などとして利用し、その分を植林して次世代に残す、森との健全な関係

を築いてきた。また、新建材の多くは石油化学製品である。石油ができるまでには50億年の時間が必要で、使ってしまった分を私たちの世代が再生できるわけではない。いっぽう、木材は健全に付き合えば、数世代で再生が可能である。それを理解して欲しいと思う。

例えば、伊勢神宮は20年ごとの式年造替そうたいで社殿を建て替える歴史が1000年続いている。そのための大工技術ばかりでなく、用材を確保する造林技術までが継承されている。また旧社殿の用材は、周辺の神社の造替に利用されるなど、健全に再利用されている。

森林資源の連携

首里城再建の起工式が、2022年11月3日に行われ、木遣きやり行列によって、長さ9m、直径1mの沖縄県北部国頭村産のオ

キナワウラジロガシが搬入された。しかし、沖縄の材木だけで、復元工事ができるわけではない。

2023年3月、3年ぶりに首里城を訪れた。「再建工事は公開を」と願っていたが、その努力をずいぶんしてくださっていた。木材を貯蔵し乾燥させる建物、図面を実際の寸法で描く現寸場などを覗くことができ、素屋根の建設も始まっていた。様々な説明板が掲げられていたが、その中に用材の調達に関するていねいな説明があった。そのまま借用する。

「首里城正殿は県内最大の木造建築で、1709年に焼失し、1712~13年に再建された際には、薩摩藩から木材19,500本あまりを入手しました。昭和の修理や平成の復元にはタイワンヒノキが多く用いられるなど、沖縄とつながりのある各地域から木材を調達しました。令和の復元においては、大径材は国産ヒノキを中心に、向拝柱は長崎県産のイヌマキ（チャーギ）、上部の屋根裏で赤瓦等の重みを支える小屋梁の一部には沖縄県産（国頭村）のオキナワウラジロガシを調達する

など、各木材産地の協力を得ながら復元されることとなっています」

展示されている用材（向拝柱）には「産地・・・長崎県」と示されていた。いつの時代も沖縄県産の材木だけでは、十分な量が確保できないようである。しかし、世界自然遺産「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の森を伐ることも決していない。

首里城の再建ばかりでなく、日本の文化財建造物の保存修復には、大量のタイワンヒノキが使われてきた。これがひとつの要因だが、タイワンヒノキは輸出禁止、そして伐採禁止となってしまった。森林保護の視点から当然の施策である。アジアの熱帯雨林も、様々な危機に直面している。北米の大規模森林火災を伝えるニュースをたびたび聞く。今大切なのは、ていねいに自然と付き合うことである。

川口をふるさとに

川口は、住みたい町の上にランクされている。交通の便がいい割に、豊かな自然も感じられる、と言うことであろう。里山を壊して建てられた住宅に住み、「ここの自然が気に入ったんだよ」とつぶやく。何とも矛盾した発想には違いないが、否定的に捉える必要はない。住民となれば、高

密度開発による不動産価格の急激な上昇より、緑豊かな自然環境がゆっくりと変化することを、望むようになると思う。

川口緑化センター樹里安には、その拠点の役割を担って欲しいと思う。



ありし日の首里城正殿 2019年5月撮影



工事中の首里城 鉄骨の覆屋建設中 この下で正殿の再建工事が始まる 2023年3月撮影



火災後の首里城正殿 2020年1月撮影



正面の向拝柱に使われる長崎県産イヌマキ



果樹と生活



渡辺 慶一 日本大学生物資源科学部特任教授・博士(農学)

スーパーマーケットや八百屋に行けば、なんらかの果物がみられる。季節によってアウトウ、ビワ、モモ、ブドウ、ナシ、クリ、リンゴ、温州ミカン、中晩生カンキツなどが登場する。品種改良や栽培、貯蔵技術の進展によって、市場に出回る期間が拡大してきている。施設栽培できた季節はずれの果実や外国からの珍しい果実など多種多様である。

果樹とは、木本性植物あるいは多年生草本性の一部の植物のうち、食用とする果実および種実を産する作物をいう。果樹の種類は非常に多く、様々な分類のしかたがあるが実用的な分類は、次の通りである。栽培される地域によって**温帯果樹**(リンゴ、ナシ、カキなど)、**亜熱帯果樹**(カンキツ、ビワ、オリーブなど)、**熱帯果樹**(マンゴー、ゴレンシ、アボカドチェリモヤ、アセロラなど)に分けられる。温帯果樹は、冬の寒さに耐えるために秋に葉を落とす落葉性で、亜熱帯果樹や熱帯果樹は一年中、高い気温のもとで育っ

ているので常緑性である。また、木の形や特性によって、**高木性果樹**、**低木性果樹**(スグリ類・スグリ、フサスグリ、**キイチゴ類**・ラズベリー、ブラックベリー、ボイセンベリー、**コケモモ類**・ブルーベリー、クランベリー、**その他**・ユスラウメ、グミ)、**つる性果樹**(ブドウ、キウイフルーツ、アケビ、ムベ、サルナシなど)に分けられる。さらに食用部分(可食部)が花のどの組織、器官が発達、肥大してきたかによって、**仁果類**(花床がとくに肥大したもの。リンゴ、ナシ、ビワなど)、**核果類**(子房壁の中果皮が果肉、内果皮が硬い核を形成しているもの。モモ、スモモ、ウメ、アウトウなど)、**堅果類**(子房壁がかたい殻になり、種子を食用とするもので水分が少ない。クリ、クルミなど)。

果樹、品種を決定する際は気象や土壌は重要な要件である。わが国では温度環境から北部温帯果樹(アップルゾーン)、中部温帯果樹、南部温帯果樹(シトラスゾーン)に分類されている。

しかし、地球温暖化の影響で果実の着色不良、貯蔵性の低下、果実軟化、成熟異常などが生じている。将来カンキツやリンゴの栽培地が北上することが予想されており、果樹の適地が変わる可能性がある。

多くの果実は多汁で多肉質な果肉を食用とするが、クリ、クルミなどは種子を食用とする。果実には炭水化物(糖)が多く含まれ、食物繊維、ミネラルやビタミン類などの栄養成分も豊富である。クエン酸、リンゴ酸、酒石酸などの有機酸や香気成分も含まれている。また、ポリフェノールやその仲間であるアントシアニン色素、脂溶性のカロテノイド色素は抗酸化作用があり、がんや生活習慣病、老化の防止などに効果のある機能性成分



南イタリアの果樹園を彷彿とさせる「まるはらいとう農園」(温州みかんの畑)

(食品の三次機能)である。平成27年4月から「機能性表示食品」制度がはじまり、食品の安全性と機能性に関する科学的根拠などの必要な事項を、販売前に消費者庁長官に届出れば、機能性を表示することができる。生鮮食品を含め、すべての食品が対象となる。日本で栽培されている果樹では温州ミカンとリンゴが各産地から届出されている。温州ミカンではβ-クリプトキサンチンが含まれており、β-クリプトキサンチンは骨代謝のはたらきを助けることにより、骨の健康に役立つことが報告されている。リンゴではリンゴ由来プロシアニジンが含まれ、リンゴ由来プロシアニジンには、内臓脂肪を減らす機能があることが報告されている。これらの機能性を商品パッケージに表示、アピールすることにより温州ミカンやリンゴの需要拡大が期待されている。品種

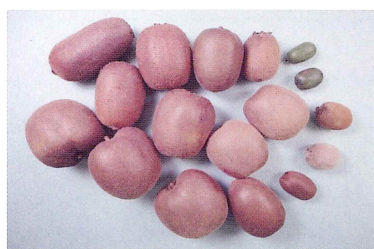
間差異はあるがキキ、ビワ、パパイヤなどにもβ-クリプトキサンチンを含有している。また、多くの野菜、果実には橙色のβ-カロテン、ルテイン、ゼアキサンチン、リコペン(赤色)などのカロテノイド色素が含まれている。β-カロテンはプロビタミンAの役割をもっている。各種の生活習慣病が問題となっている現在、健康を維持するためにバランスのある食生活が求められおり、果実を積極的に摂取したいものである。

川口市の果樹栽培は、農林業センサスによると栽培面積は非常に少ない。しかし熱心に果樹栽培に取り組んでいる農家が見受けられる。バラの他にカンキツ類の苗木を勢力的に接ぎ木生産している長嶋薔薇園、西新井宿で温州ミカンやレ



高速道路が借景。こんな場所ほかにはありません「まるはらいとう農園」だけです!
(紅甘夏(夏みかん畑))

モンなどを栽培しているまるはらいとう農園を訪問する機会があった。まるはらいとう農園のカンキツ類は若木期であったが成木になり成果期に達するのが楽しみである。川口市では昔から植木・苗木の生産が有名である。近年、生活様式の変化、拡大などにより果樹に興味を持っている人は多いと思われる。都市近郊の立地を生かした直売所、観光果樹園、農産物の学校給食への提供、総合的な学習の時間における農業体験、これらの果実を用いた加工品の販売、など多方面の展開が可能と思われる。果実は私たちの豊かな食生活を提供するとともに、健康の維持、増進といった機能性など注目されている。川口市における果樹栽培の拡大を願っている!



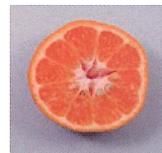
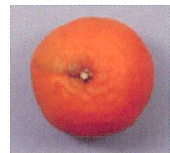
色々なキウイフルーツおよび近縁種
(サルナシ、マタタビなど)



マンゴー 'アーウィン'



リンゴ 'みずつがる'



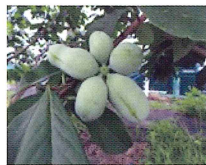
中晩生カンキツ '早香'
(今村温州×中野3号ポンカン)



フェイジョア 'マンモス'



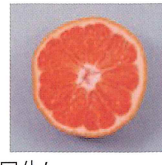
ゴレンシ 'タイナイト'



ポポー 'デービス'



ブルーベリー 'ダロー'



温州ミカン '興津早生'

* 果実写真は筆者が神奈川県藤沢の大学研究圃場で栽培している果樹の一部である。ビニルハウス内で簡単な暖房設備で熱帯果樹(ジャボチカバ、アセロラ、ミラクルフルーツ)の栽培が可能である。

安行界隈の希樹・珍樹を探る! メタセコイア

(*Metasequoia glyptostroboides*)

今年は牧野富太郎がブームである。この4月から始まったNHK朝ドラの主人公のモデル、我が国植物学の父とも称されるその人である。生涯新種の植物を求めて全国を巡っていた牧野富太郎は、植木の里安行へも研究の為にたびたび足を運んでいたようである。安行の好樹園には牧野富太郎自筆の書状が残されている。昭和18年、牧野富太郎81歳の夏、安行の植木屋を案内して廻った当時の園主、中田臈右衛門へ宛てた丁寧な礼状である。好樹園は安永8年(1779年)創業の植木の老舗で、現在は造園、建設まで手掛ける総合造園会社として営業を続けている。この好樹園の園内に1本のメタセコイアの大きな木がある。メタセコイアは、かつて化石でのみ知られていたが、1945年中国奥地で生きている木がはじめて見つかった。この驚きの発見により「生きている化石」と呼ばれた樹木である。我が国に入ってきたのはそれから5年程後といわれている。成長が早く、通常は自然と美しい円錐形の樹形の高木となる。ラクウショウ、カラマツと共に、針葉樹系で落葉する数少ない樹種のひとつである。好樹園のメタセコイアは、この種が日本に入ってから間もない昭和29年、近隣の「花と緑の振興センター」(当時は埼玉県植物見本園)と同時に植えられたものとのこと。その樹齢は70年を超えており、我が国の最古木の部類に入るものと云えるであろう。周囲の樹木よりひときわ高く、園外からも頂上部がよく見える。一見したところ通常目にするものに比べ、葉が少なく枯枝も多く、形も綺麗な円錐形には成っておらず、樹勢があまり芳しくない印象である。園内にて木を良く観察すると、根本はメタセコイア独特の盤根状に発達している。

幹回りは4.2m、高さは30mに迫る。周囲には多くの木々が密集しており、低部の日当りはあまりよくない。根元から幹を這い上がるツタが幾本も強力に成長して幹に食い込んでおり長年にわたり幹や枝から養分を奪い続けていると思われる。つるの巻き付きによってすっかり枯らされてしまった枝も見られる。落雷もあったようで、南側には傷や枯れた枝が多く見られる。又、周囲の木々の密集による地下での激しい根の張り合いは容易に想像出来る。この木の樹勢が芳しくない原因は主にこれらの事態によるものかと思われる。植物は、地上では太陽光を求めて、地下では水を求めて常に競争をしており、勢いの弱いものは枯らされてしまったり日陰に取り残されることになる。この木は、こうした不利な状況には置かれているが、周囲の樹木よりなんとか高く成長出来ていることで生き延びている。

幹を上るツタを根元から全て剥がし、枯れ枝を取り去り、周辺の整理を行うなどして日当たりや環境を改善出来れば、必ずや樹勢も回復し、美しい大木と成っていくことであろう。

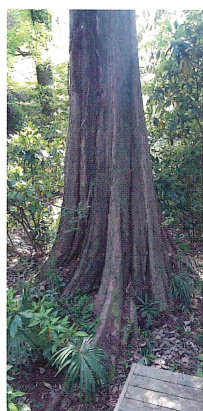
早い対策が望まれる。

川口市は、市内の貴重な樹木を保存樹として指定しており、その数は現在200本を超えているが、今のところこの中にメタセコイアは一本もない。今後、樹勢が回復し、健康に成長を続けていければ市の指定樹木にも数えられることもあろう。好樹園のシンボルツリーとして、安行を代表するメタセコイアとして世紀を超えて生き続けて欲しい貴重な樹木である。

樹木医・川澄 寛國



高いので園外からよく見える



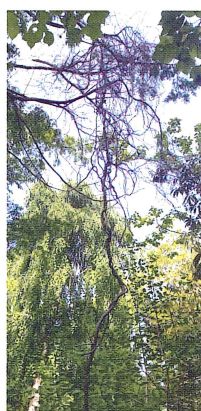
根本はメタセコイア特有の形状に発達している



根元から幹を這い上がるツタ



ツタは高くまで上り、多くの枯れ枝が見られる南側



ツタが巻き付き枯れた枝



周囲は多くの樹木に囲まれている

アクセス



川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」

ジュリアン
樹里安

発行 令和5年3月

公益財団法人 川口緑化センター

〒334-0058 川口市安行領家844-2

☎ 048-296-4021



<https://www.jurian.or.jp/>